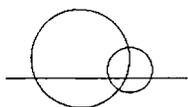


〔国内シンポジウム〕



本年度の国内シンポジウム開催にあたって

東亜同文書院大学記念センター長 藤田佳久

当記念センターのオープン・リサーチ・センターの事業でのシンポジウムは、国内と国際の両シンポを交互に行ってきた。1年目は国内シンポジウム、2年目は国際シンポジウムで、中国の上海交通大学系グループとの史実をベースにした画期的な東亜同文書院研究のシンポジウムを行った。そして本年度の3年目は国内シンポジウムの年にあたり、実施した。

テーマは「東亜同文会の東アジアにおける教育活動とその展開」として設定し、東亜同文書院の経営母体である東亜同文会の東アジアでの教育事業展開を検討するシンポジウムとした。東亜同文会は教育趣旨からも東アジアでの教育レベルの向上こそが東アジアの安定、列強による侵略への抵抗力をつけるものであり、それに東亜同文会が中心になってかかわってすすめるというのが東亜同文会会長となった近衛篤磨の考え方であった。

その最初の緒口には、近衛が院長をやっていた学習院のある目白に東京同文書院を開学し、清国の留学生を受け入れた。その経緯については、別の日の講演会で保坂治朗氏による「目白にあった東京同文書院」と題した発表があり、今回のシンポジウムの序章の役割を果たしていただいた。この

発表内容については、当記念センター刊「同文書院記念報」No.17に収録したので、こちらをご参照いただけたら幸いである。

このあと東亜同文会は朝鮮半島での一般学校、語学学校の設置を行い、朝鮮人を対象とした教育を行った。そして中国上海に東亜同文書院を設け、両国の貿易実務者を養成し、さらに中華学生部を併設して中国人教育も担った。そして、中国各地にいくつかの教育施設を設け、教育事業の東アジア展開を行った。東亜同文書院はその中の一つの日中貿易実務者養成のビジネススクールとして設けられ、のちにアカデミックな性格を備えるようになり、大学へ昇格するなど、東亜同文会の学校経営の中でもユニークで重点化された高等教育機関となった。

今回のシンポジウムは、そのような東亜同文書院の東アジアでの教育事業の展開と、それぞれが成立した経緯と近代日中関係史の中での役割などを、それぞれの分野の第一人者に論じていただいた。今後の研究課題に多くのヒントをいただき、刺激的であり、論者の各位とコメントーターに厚くお礼申し上げたい。